

高等学校におけるキャリア・カウンセリングの導入とその課題

ーキャリア・カウンセリング事例に関する調査結果を踏まえてー

静岡大学 山崎保寿

【キーワード】 キャリア教育、キャリア・カウンセリング、進路指導、キャリア・カウンセラー

1 高校生の進路状況に関する問題

中学校・高校・大学卒業後3年以内の早期離職者の状況は、七五三現象といわれる。実際、新規学卒就職者の卒業後3年以内の早期離職者は、中学校卒が70.4%（1年目は48.0%）、高校卒が49.3%（1年目は25.1%）、短大卒が43.4%（1年目は19.1%）、大学卒が35.7%（1年目は15.3%）と深刻な状況である（厚生労働省「新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移」平成15年3月卒業者の3年後を調査したもの）。卒後3年以内の早期離職者の比率は、当時から10年前の平成5年に比べ、高校卒で9.0%、大学卒で11.4%高くなっている。それだけ、高校生にとって将来展望が見えにくい不透明な状況になっているといえる。

また、文部科学省の平成18年度学校基本調査によると、平成18年3月に高等学校を卒業した生徒の大学等進学率は49.3%（前年度47.3%）、就職率は18.0%（同17.4%）、進学も就職もしていない者の比率は5.7%（同6.6%）である。大学等進学率が上昇していることは、望ましいことではあるが、同時に若者の勤労観・職業観の発達という面が遅れていくことを意味する。

大学を卒業した者については、平成18年度学校基本調査によると、大学院等への進学率が12.1%（同12.0%）、就職率が63.7%（同59.7%）で、進学も就職もしていない者の比率は14.7%（同17.8%）である。就職率の63.7%という比率は、過去最低であった平成15年度の55.1%より回復しているものの、そのうち約3割が、3年以内に離職していることになる。

このように、現代の高校生は、不透明で複雑な現代社会の中で自己の進路や生き方を模索している。高卒・大卒後も未就職・無業者（ニート）であったり、正規職員としての就職を望まない若者（フリーター）の実態は、若者の勤労観・職業観という点で必ずしも望ましいものとはいえない。フリーター・ニートや早期離転職者が若者の間に増加していることから、高校生の段階において必要な職業意識を醸成し職業観・勤労観を身に付けていくことが必要である。こうした点が、キャリア教育の導入が必要とされる所以である¹⁾。

一方で、実際に高校生が自己の将来や進路について考えようとする場合、自己の適性・能力に対する見極めが十分でなく社会的経験が少ないこともあり、進路選択前の段階で迷うことが多い。また、高校生の職業理解は現実的でない場合があることから、将来の夢と現実との差をどのように埋め進路を達成したらよいのか本人自身が分からないこともある²⁾。高校生の進路選択に関する悩みに対しては、必要に応じて専門家のアドバイスが受けられるようにすることが重要である。

これらを踏まえ、本稿では、キャリア教育導入とともに重要となるキャリア・カウンセリングの必要性とその意義について考察する。なお、本稿の内容は、筆者がこれまで行ってきたキャリア教育に関する研究および高校教員用のキャリア・カウンセリング事例集の監修に携わってきた

経験に基づいている。

2 キャリア・カウンセリングの意義

以上に述べた高校生の進路状況に関する問題は、高校・大学卒業後におけるフリーター・ニートの増加や早期離職者の増加、若者の勤労意欲の低下など様々な問題と関連している。これらの問題の背後には、個人の人生観・価値観の変容と個人的志向の強まりといった社会全体における人々の意識の変容、そして、大企業の経営破綻の一方でベンチャー企業の躍進など産業構造の変化といった社会的な要因が大きく影響している。社会の激しい変化と将来に対する不透明さは、高校生の進路や進路選択に至るプロセスに多大な影響を与えている。

一方、無業者の代名詞であるニートにしても、必ずしも働く意欲がないのではなく、人間関係のつまづきで無業状態が長引いている者がいる。人生は、進路に関する選択と適応の連鎖によって形成される。それぞれの個人にとって、進路や職業に関する悩みは様々であるが、人間関係のつまづきなどが、進路や職業の選択に影響することは事前に避けなければならない。進路に関する悩みをもつ高校生に対して、自らの進路を見出し達成していく能力（キャリア形成能力）を育成する必要があると高まっているといえる。高校生の進路に関する様々な問題を改善するために、本人の責任や努力だけに任せず、新たに大人や学校が支援の手だてを講じることが必要である。

そうした新しい手だての一つが、キャリア・カウンセラーと呼ばれる専門家が担当するキャリア・カウンセリングである。キャリア・カウンセラーとは、一定の資格をもつカウンセラーの一種であり、カウンセリングを通じて相談者のキャリア発達を様々な支援する人々である¹³⁾。キャリア・カウンセリングは、生徒の進路や生き方に関わる相談活動であり、生徒自身の自己決定を促し、生徒が主体的に自分の進路や生き方を決めていくように導く活動である。キャリア・カウンセリングは、発達の観点に重きを置く相談活動であり、卒業時のより良い進学や就職を目的とする進路指導や、生き方・在り方指導、また、後述するようにキャリア教育と関連的に取り入れることで効果がある。なお、本稿におけるキャリアという言葉の意味は、職業をはじめ、ボランティアや趣味なども含めて、個人が人生で経験する様々な履歴を幅広くとらえている¹⁴⁾。

3 キャリア・カウンセリングの領域

学校教育の観点から見たキャリア・カウンセリングには、3つの領域がある。

第一は、進路・職業に関する相談である。高校生が進路の選択に迷ったり、進路に関する目的を見い出せず目標を見失うことが少なからず生じている。こうした生徒に対して、適切なアドバイスを行い、生徒が主体的に自己の進路を考え、目標を発見できるように助言することである。キャリア・カウンセラーは、担任とは異なる第三者的な専門家である。学校が行う学習指導や生活指導とは異なる観点から、キャリア・カウンセラーは、生徒を見つめ悩みを聞く。学校指導の一環として接している担任とは、ラポール（親和関係）の取り方が異なることになる。そうした専門家が相談に関わることで、生徒も、日頃とは違った角度から自分を見直すことができる。

第二は、生徒のキャリア発達を支援することである。高校生の時期は、進路や職業に関する探索段階から確立段階に至る時期である。進路や職業に関する意識と能力を獲得するために、自己

のキャリア開発の方法を生徒とともに考え、具体的な目標に向かって進むことができるよう導くことである。それにより、生徒のキャリア形成能力を高めることである。キャリア・カウンセラーが、学校外からの視点や人生の長いスパンに立った視点から助言することで、担任や学校の指導を補うことができる。

第三は、学校組織や進路指導体制に対して、キャリア・カウンセラーの立場から助言を行うことである。外部の専門家から意見をもらうことで、普段見えにくい課題が明らかになり、進路指導体制の改善を図る契機となる。学校教師の中にも、生き方在り方指導を中心として、生徒の生活や人生全体を考えた進路指導を前向きに行う教師が増えており、キャリア・カウンセラーとの連携が重要である⁶⁾。また、新しい進路指導の方法として、キャリア教育に関する校内研修の講師をキャリア・カウンセラーが務めることもある。学校の進路指導体制に関する外部の専門家による意見は、進路指導体制の改善を図るうえで貴重なものである。そのための校内研修の推進が重要な課題になる(図1)。

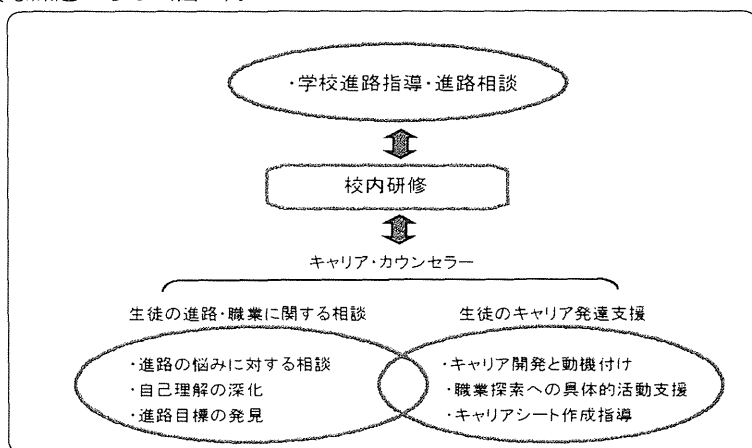


図1. 学校教育におけるキャリア・カウンセリング

以上が、学校教育の観点から見たキャリア・カウンセリングの領域である。これらの領域のうち、本稿で扱う事例は、第一の領域に関する内容のものである。表1は、これらの領域とその対象をまとめたものである⁶⁾。キャリア・カウンセラーによるこれらの専門的活動は、高校生にとって必要かつ有益なものである。最近では、自治体レベルで高校生へのキャリア・カウンセリングを推進しているところも見られる⁷⁾。今後は、高等学校の進路指導において、キャリア教育の導入とともにキャリア・カウンセリングを活用していくことが重要である。

表1. 学校教育におけるキャリア・カウンセリングの領域

(1) 進路・職業に関する相談	(2) 生徒のキャリア発達支援	(3) 進路指導体制への助言
<ul style="list-style-type: none"> ・進路の悩み相談 ・自己理解の深化 ・進路目標の発見 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア開発と動機付け ・進路目標の達成支援 ・キャリアシートの指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導体制の課題発見 ・進路指導体制の改善 ・校内研修講師
対象：生徒	対象：生徒	対象：教師・学校

4 キャリア教育の一環としてのキャリア・カウンセリング

キャリア・カウンセリングは、キャリア教育の一環として進めることが重要である。キャリア

教育とは、生徒が主体的に生き方や進路を選択決定し、人生や職業生活の中で、十分な自己実現ができるのに必要な能力や価値観を育成する学習を行うものである。つまり、キャリア教育は、生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、生徒が自己の将来や人生を考え、自己に相応しいキャリア形成を行うために必要な意欲・態度や能力を育てる教育である。キャリア教育は、新しい進路指導の考え方として近年注目されている。

文部科学省のキャリア教育報告書（2004.1.28）は、今日キャリア教育が求められる背景を分析しているが、それをまとめれば次のようになる。すなわち、①少子高齢社会の到来、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず進路選択をめぐる環境が大きく変化していること。②学校における教育活動が、ともすれば生きることや働くことと疎遠になり、十分な取組が行われてこなかったこと。③就職・就業をめぐる環境の激変として、新規卒者に対する求人が減少した反面、求職希望と求人希望との不適合が拡大していること。④若者自身の資質等をめぐる課題として、勤労観、職業観の未熟さが見られるとともに、職業人としての基礎的資質・能力が低下していること。⑤子どもたちの生活・意識の変容として、生産活動や社会性等における未熟さがあり、身体的な早熟傾向に比して精神的・社会的自立が遅れる傾向が見られること、である。

現在、学校教育においては、社会の変化に応じて進路指導に関する考え方もキャリア教育を中心とした新しい考え方が取り入れられつつある。キャリア教育の観点においても、進路に関する多様な相談にのるキャリア・カウンセラーに対する期待が高まっている。高校教育は、社会的に未成熟な成長段階にある生徒が、将来の自立に向けて進路と職業を選択決定することを援助するところである。こうした段階にある高校生に対して、キャリア・カウンセリングの特徴を生かし、生徒のキャリア発達に関する支援体制を整えることの社会的要請度が高まっているのである。

こうした社会的ニーズを踏まえれば、学校の校内分掌においても、外部のキャリア・カウンセラーと連携し、進路相談を専門に行うキャリア・カウンセリング担当の教員を配置するなどの措置をとることが肝要である。冒頭に述べた高校生を取り巻く深刻な進路状況と合わせて考えれば、高等学校では、現在の進路指導体制を見直し、早急にキャリア教育の指導体制を整える必要があるといえる。

5 高校生の時期におけるキャリア・カウンセリングの必要性和意義

高校生の時期において、キャリア・カウンセリングはどの程度必要とされているだろうか。筆者は、キャリア・カウンセリングの必要性和意義がどのように理解されているかを調べるために、高校生の時期を終了している大学生に対して、彼らの高校時代にキャリア・カウンセリングを受けることができたとした場合、キャリア・カウンセリングの必要性和意義をどのように考えるかを質問した。以下、調査の概要を示す。

調査対象は、信州大学教育学部における筆者担当授業の出席者 50 名である。調査時期は 2006 年 12 月 21 日である。質問項目に部分的な無回答は見られたが、50 名全員が回答し有効回答数は 100 % である。調査に当たっては、予め、授業でキャリア教育とキャリア・カウンセリングの概略を説明して予備知識を与えたうえで調査を行った。調査方法は、まず、夢のデザイン塾が作成した本事例集の前号である『高校教職員向けキャリア・カウンセリング事例集』（2006 年）に

掲載された事例^⑧を大学生に読んでもらい、次に、事例の趣旨を筆者が解説したうえで、大学生に質問項目に答えてもらうという方法である。

事例の概略＜大学受験直前になっても進路が決められない。このままだとニートになりそうで心配＞

【相談者】優花さん(仮名) 普通高校(進学校)3年生 女子

【来談経緯】将来やってみたい職種はいくつかあるが漠然としており、現在は決められない。大学進学後に方向性を出していきたいと考えている。学部も選択の幅を広く持てることを前提に決定。学力は上位。しかし受験間近になり、就職も選択肢に入れたいと担任教諭に相談。進路指導では本人の希望意志が明確化できず、教諭のすすめで来談した。

【相談経過】不安そうな表情で節目がちに来談。沈黙が多く考えながら応答する。他者に自分の考えを伝えることに抵抗がある様子(対人不安)がうかがえる。進学、就職へと選択をにぶらせている気持ちの変化を聞くうち、自分の意志の弱さについて話し始める。

カウンセラー：進路について迷っていると聞いたんだけど、どんなことかしら？

優花さん：将来やりたいことはあるのですが、それがいくつかあって決められません。それでとりあえず、いろんなことを勉強できそうな大学の社会学部に進学することをきめたんですが…。

カウンセラー：やってみたい仕事があるのね。それはどんな仕事なの？

優花さん：国際関係で外国と関わるような仕事とか、環境問題に関する仕事とか、あと観光にも興味があります。でも、どれにするか決められません。

カウンセラー：今は決められないから、大学の社会学部に進学して勉強しながら決めていこうと考えているのね。

優花さん：でも本当にそれでいいのか、迷ってしまって…。

カウンセラー：決められないまま進学することが、いけないことのように感じるの？

……………(以下略)

(1) 専門家に相談したい進路の悩みがあったか

図2は、事例を読んだ大学生が、高校生のとき専門家に相談したいと思うほどの進路に関する悩みがあったかを聞いたものである。「はい」と答えた学生が28%、「いいえ」と答えた学生が68%である。約3分の1の学生が、高校生のときに、専門家に相談したいと思うほどの進路に関する悩みを持っていたことが分かる。以下は、大学生が答えた専門家に相談したいと思った進路の悩みの例である。

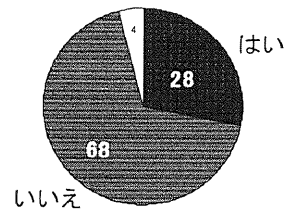


図2. 専門家に相談したい悩み

専門家に相談したいと思った悩みの内容(例)

・私は、なりたい職業がなかなか見つからず、何学部に進学したらいいのかをすぐに決めることができませんでした。教育学部に進学したのは、母の勧めが大きいの、(自分も納得して決めた進路であるが)自分自身の力で自分に合う職業や学部を見つけることができれば良かったと感じます。

・高校時代は、高校卒業後、就職するとしたらどんな職業に就くことができるのか、また、高卒での就職の待遇を知りたかった。そして、いろいろな職業を知るとともに、それらの仕事に必要であったり持っていたらよいという資格や免許の取り方・免許や資格の仕事への活かし方を知りたかったが、どうすればよいか分からなかった。

・私は中学校時代からずっと吹奏楽部で楽器をやっていました。そこで、ぜひ音楽に携わる仕事をしたいのですが、私は音感も無く、音楽の世界は吹奏楽しか知らなかったのもこのまま音楽の世界に突き進んでいいものかと悩んでいました。

・私は県内でも有数の進学校に通っていたが、元々は大学進学など希望していなかった。中学の頃からやりたいことがあって、高校もその職業に関わった専門性の高いコースのある高校に行こうと思っていたのだが、中学校の担任の先生に引き止められ、話し合いの結果、進学校に進むことを決めた。でもやはり、その職業を諦めきれず、高校卒業後は専門学校に進むつもりでいた。しかしその高校は、あまりに進学校の色が強すぎて、入学直後から「第一志望の大学は？」と聞かれ、大学受験、しかも国公立や有名私立大学であること

が前提というような環境で、親にも担任にも自分の気持ちを打ち明けることが出来なかった。でも、高校3年生になり、勇気を出して担任に話してみたところ、予想通り猛反対を受けた。「とりあえず大学は出ておいた方がいい」と。私のことを考えて、親身になってアドバイスをしてくれたのだろうが、私には、進学校の立場上どれだけ多くの生徒を国公立や有名私立に入れるか、を気にしているようにしか思えなかった。もちろん学校は何のサポートもしてくれないので、私は自主的に専門学校の資料を集めて調べたり、体験入学に行ったりしていたが、悩みに悩んだ結果、多くの反対がある中で絶対に成功させるという自信がなかったこと、賛成してくれていない親に多額の入学金を払ってもらわねばならないと思ったことなどを理由に専門学校を諦め、自分の視野を広げようと大学進学を決めた。高校の先生は、大学受験の専門家である。今は、大学に進学したことを後悔してはいないが、あの時、もっと客観的な立場から進路相談に乗ってくれる人がいてくれたらどうなっていただろう、と今でも思う。

(2) キャリア・カウンセリングを受けたいと思うか

図3は、高校生のとき事例のような悩みを持ったとしたら、キャリア・カウンセラーが行うキャリア・カウンセリングを受けてみたいと思うかを聞いたものである。「はい」と答えた学生が64%で、約3分の2を占めている。進路に関する深刻な悩みを持った場合に、キャリア・カウンセリングに対する要望が強いことが分かる。以下は、その理由の例を示したものである。

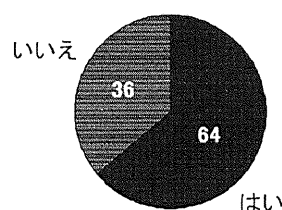


図3. キャリア・カウンセリングを受けたいか

キャリア・カウンセリングを受けてみたい理由(例)

- ・きちんと話を聞いてくれるカウンセラーに相談することで、自分の気持ちを自分なりに整理することができると思う。カウンセラーの方は頭ごなしにこれはだめ、あれはだめ、というのではなく、まず話を聞いてくれて、今の、この悩んでいる自分を肯定的に受け止めてくれている。だから、悩んでいても批判的になることなく、肯定的に自分自身について考えることができると思う。
- ・私は、教育学部に進み教職に就きたいと決めていたが、長野県出身でそのまま長野で教採を受けるには信大が一番近い道なのか、もっと規模の大きい他県の大学を目指すのかで悩んでいた。このときに、大学の先の職業を視野に入れながらアドバイスを受けたらよかったと思うから。
- ・進路の悩みを担任の先生や親には相談できず、もしこの時、受けられたならキャリア・カウンセリングを受けてみたいと思ったと思います。進路は最終的には自分で決めなければなりませんが、この時は悩んでいたもので、何か適切なアドバイスをしてくれる人がいてほしいという思いがありました。
- ・自分の進路の最終決定は自分でしなければいけないけれど、自分の中で考えているだけでは視野が狭まってしまい、本当によい結論には辿り着けないのではないかと考えるからです。キャリア・カウンセリングを受けることで、自分の進路に自信を持つてすすめると思います。

(3) 高校教師が行う進路相談と違いを感じるか

図4は、事例のキャリア・カウンセリングに対して、高校の教師が行っている進路の悩みに関する相談と違いを感じるかを聞いたものである。「はい」と答えた学生が77.1%で、3分の2以上を占めていることから、多くの学生が高校の教師が行っている進路の悩みに関する相談とキャリア・カウンセリングとの違いを感じていることが分かる。以下は、どのような点に違いを感じるか、その例を示したものである。実際、キャリア・カウンセリングに関する諸々の事例からは、「生徒の心を開かせる

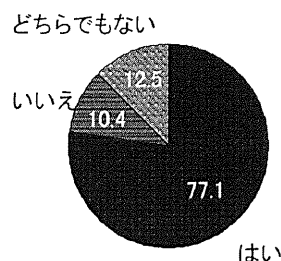


図4. 高校教師の進路相談と違うか

言葉のきっかけ」「生徒の自己理解を深めるための言葉かけ」「進路目標が漠然としている生徒の導き方」「進路目標を持ちにくい生徒への視点の与え方」「家族と進路に対する意見が一致しない生徒へのアドバイス」など、教師が見落としがちな点に対するヒントを多々見つけることができる。

高校教師が行う進路相談と違いを感じる点（例）

- ・担任の先生の場合、将来の仕事というよりは、どちらかという、定期考査の成績と、それにあった大学選びということになりがちである。それに比べ、キャリア・カウンセラーのアドバイスは、もっと広い意味での進路について考えられていると思った。しかし、普段の性格などをよくわかっているのは、普段接する担任の先生だと思うので、どちらも必要だと思う。
- ・高校の教師と、カウンセラーの一番の違いは、やはり聞くときの態度だろう。カウンセラーは、十分に来談者の話を聞いてくれ、受容や共感という態度を示してくれる。その上で、生徒の思いをもとに、考えを整理し、結論を出す手伝いをするというイメージである。一方、教師は、生徒の話を十分に聞くという印象がない。そのかわり、教師はアドバイスをすることに重点を置くように思う。
- ・教師も、十分相談に乗れるだけの知識は持っているであろうけれど、やはり、そうは言っても教師はあくまで教師であり、専門家に比べたら、対話技術や就職等に関する知識はかなわないと思います。しかし、日ごろからその生徒を見ているのは教師なので、その生徒の置かれている詳しいバックグラウンドや細やかなフォロー等は教師のほうが出来るかもしれないと思います。
- ・私の高校時代では、進路指導はまず「どこの大学に行くか」というところから始まった。進学校だから仕方ない気もするが、自分の夢や目標を見つけるとか、どんな仕事に就きたいかということではなく、目先に迫っている大学進学のことを進路指導の中心だった。ここがキャリア教育との大きな違いだと思う。まず、生徒自身が自分の人生に夢や目標を持てることが先決であり、どこの大学に行くかというのは、夢が持てた時に自分で決断すればよいのではないだろうか。自分の可能性を現実的に考えて悲観したり、あきらめることが当たり前になりつつある今の現状は、目標を持つことがいかに重要で強力な影響力かを知らない指導者が生み出したものと言っても過言ではないと思う。大学に生徒を振り分けていこうとする従来の進路相談を改めて、生徒自身に人生設計能力を植え込むキャリア教育を導入させた進路指導を一日も早く徹底させるべきであると思う。
- ・高校の教師は、早く進路を決めさせるために色々なことを言いますが、このキャリア・カウンセラーは、頭の中の絡まった糸を解き、抱えている問題を解決させています。そしてその結果、生徒が自主的に考えています。高校の教師の進路相談では、そこまで深いことには関わってこないことがほとんどだと思います。高校の教師はクラス全員の進路を決める手伝いをするので大変忙しく、そこまで親身になれる時間が無いと思います。それは仕方の無いことでもあるので、キャリア・カウンセラーの助けによって担任の忙しさも軽減し、生徒一人ひとりについて考える時間が取れるようになるといいと思います。生徒は、担任の言葉は緊張して重く受け止めがちですが、キャリア・カウンセラーと話したことは心にすんなり入っていくと思います。生徒に心のゆとりを持たせることができるということが最も違う点だと思います。

6 本稿のまとめと今後の課題

以上のように、キャリア・カウンセリングに対する関心と要望が高まっている。本稿の内容をまとめれば、次の3点になる。

第1に、高校生は自己の適性・能力に対する見極めが十分でなく社会的経験が少ないこともあり、進路選択前の段階で迷うことが多い。キャリア教育の導入とともに、高校生の進路選択に関する悩みに対しては、専門家のアドバイスとしてのキャリア・カウンセリングが受けられるようにすることが重要である。

第2に、生徒を対象としたキャリア・カウンセリングの領域としては、進路・職業に関する相談として、進路の悩みに関する相談、自己理解の深化、進路目標の発見などがある。そして、生徒のキャリア発達支援として、キャリア開発と動機付け、進路目標の達成に対する支援、キャリ

アシートの指導などがある。これらの指導をキャリア・カウンセラーと学校とが連携して実施していくことが重要である。

第3に、大学生に対して、キャリア・カウンセリングの必要性和意義を質問したところ、約3分の1の学生が、高校生のときに専門家に相談したいと思うほどの進路に関する悩みを持っていたことが分かった。そして、キャリア・カウンセラーの相談と高校の教師が行っている相談と違いを感じるという答えが3分の2以上を占めていることが分かった。キャリア・カウンセリングに関する諸々の事例には、「生徒の心を開かせる言葉のきっかけ」「進路目標を持ちにくい生徒への視点の与え方」など、教師が見落としがちな点に対するヒントが数多くある。高等学校では、キャリア教育の導入とともに、進路に関する教師の指導の幅を広げるために、キャリア・カウンセリングを活用していくことが重要になる。

今後の実践課題は、キャリア・カウンセリングをキャリア教育の一環として進めるために、校内研修を一層推進していくことである。今後の研究課題として、キャリア・カウンセリングは、個別の相談であるため、質的方法による事例の蓄積がなされる。このことから、キャリア・カウンセリングの効果に関して、テキスト・マイニングの手法により、質的方法と量的方法とを組み合わせた分析手法が重視される必要があると指摘できる。

【注】

- (1) 山崎保寿「キャリア教育の教員研修における課題と展望」『月刊高校教育』2005年12月、44～49頁。
- (2) 大野木裕明は、高校生のキャリア・プランニングにおける具体性や現実性に欠ける傾向を指摘している。(大野木裕明「キャリア・カウンセリングの実践と課題」『福井大学教育実践研究』1998年、第23号、63～77頁)。
- (3) 筆者の関係では、NPO「夢のデザイン塾」のキャリア・カウンセラーが、キャリア・カウンセリングを通じて高校生のキャリア発達を支援している。
- (4) 本稿では、文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(2004.1.28)におけるキャリアの定義と同方向で、幅広いキャリアの概念に立っている。
- (5) 本稿におけるキャリア・カウンセラーは、教師以外の専門家である。教師のキャリア・カウンセラーによる実践としては次がある。太池公紀「総合学科におけるキャリア・カウンセラーの実践」『産業教育』1999年1月、39～43頁。
- (6) キャリア・カウンセリングの内容に関しては、日本進路指導学会編『キャリア・カウンセリング』(実務教育出版、1996年)等が示してきたが、ここでは領域として整理した。
- (7) 例えば、兵庫県では、平成18年度から高校生早期個別キャリア・カウンセリング事業を実施している。
- (8) 夢のデザイン塾『高校教職員向けキャリア・カウンセリング事例集』2006年3月発行、23～25頁に掲載された「大学受験直前になっても進路が決められない。このままだと『ニート』になりそうで心配」(相談者：普通高校(進学校)3年生女子)という事例である。